

ご逝去から半年以上経過した現在でも、いまだに言葉が思いつきません。私は北海道大学原子核理論研究室で大西先生の指導を受け、また京都大学基礎物理学研究所では大西先生をリーダーとする原子核理論グループと一緒に教員を務めさせていただきました。北大と京大の両方で(計18年間)大西先生と同じ研究グループに所属させていただいたのは、思い返してみますと私だけでした、なんと幸運なことであったのか、とつくづく感謝しております。

私は大西先生が初めてパーマネント職を得られて北海道大学に着任された1993年4月に研究室配属となった4年生でして、大西先生にとっては最初の指導すべき4年生、その翌年には最初のM1になりました。以降大学院の5年間を含めた6年間、本当にありとあらゆるご指導をいただきました。原子核物理学のいろははもとより、研究発表の仕方や論文の書き方はもちろん、コンピュータの使い方からグラフの描き方に至るまで、ありとあらゆる知識を授けていただきました。当時の大西先生は、もちろん最後までそうでありましたが、非常に活力に溢れておられ、ハドロン物理学だけではなく、原子核構造研究にも野心を抱いておられました。分子動力学計算を教わりながら、最初の論文と一緒に仕上げたことをなつかしく思い出します。また、常にご家族を大事になさっており、数々のエピソードをお話くださいました。

私は2010年に京都大学基礎物理学研究所に移り、2008年より基研に移られていた大西先生をリーダーとする原子核理論グループに所属いたしました。以降2022年まで、今度は同じ教員という立場で、近くで大西先生に接する機会に恵まれました。基研では、大西先生がクォーク・ハドロン物理学を総括され、私は核構造や核反応といった低エネルギー原子核物理学を担当するという役回りではあったのですが、実際には大西先生に低エネルギー原子核物理学を大いに助けていただきました。大西先生は低エネルギー原子核物理学のセミナーや研究会にも必ず参加され、常に原子核物理学全体を見渡しておられました。京大基研における大西先生の印象は、これは北大時代と変わりませんが、とにかく、ありとあらゆる研究発表や会議の場で必ず発言や質問をされる方であった、と言うことが一番です。大西先生は、どんなに専門の異なる講演に対しても的確な質問をして、場を和ませる特殊な才能をお持ちで、まさに icebreaker でした。また、長年、所の目玉事業である滞在型プログラムの実行委員長を務められ、またある時は副所長として、常に研究所全体を見渡しておられました。その一方で、原子核物理学の伝統を守らなくてはならないという強い使命感に燃え、分野のために戦っておられる姿もいつもま近で拝見しておりました。

ご逝去から半年以上経過した現在でも、本当に言葉を失うほどの衝撃を受けております。何から申し上げてよいのやら考えが全くまとまらず、この追悼文も締め切りの今日になってようやく書き始めているような有様です。最後まで、本当に出来の悪い弟子で申し訳ありません。また、大西先生の直弟子として長い期間を過ごしてきたのを良いことに、大西先生の存在がもたらしてくださる数々の恩恵を、あつて当然のものとして捉えていた感があり、その点が悔やまれてなりません。もともと、大西先生のご存在に感謝すべきでした。残された我々は、とにかくにも大西先生の御遺志を受け継ぎ、発展させていくほかない、としみじみ感じております。

板垣 直之 (大阪公立大学)